

助成事業完了報告書

日本財団 会長 笹川陽平 様

報告日付：2012年4月15日
事業ID：2010870581
事業名：海と船の企画展「青函連絡船と津軽海峡の旅」
団体名：(特)語りつぐ青函連絡船の会
代表者名：理事長 木村一郎
TEL：0138-27-0227(事務局)、0138-27-2500(摩周丸)
FAX：0138-27-2550(摩周丸)
事業完了日：2012年3月31日

事業費総額	2,719,172円
自己負担額	719,172円
助成金額	2,000,000円

事業内容：

1. 海と船の企画展「青函連絡船と津軽海峡の旅」の実施

(1) 期間：2011年7月23日～2012年3月31日

広報・宣伝は学校休暇期間(多客期)にあわせ、7月23日～8月31日、12月22日～2月12日、3月17日～4月9日の3期に分けたが、当該期間終了後も展示物の撤収は行なわず、期間ごとに展示物を拡充した。

(2) 会場：函館市青函連絡船記念館摩周丸

(3) 内容：

A. 映像シアターの設置

青函連絡船の記録フィルム、ビデオテープをデジタル化して、大画面ディスプレイで視聴できるようにした。3階「連絡船のあゆみ展示室」右舷前方に設置。

当初は、ひとつの番組が入ったDVDをリピート再生、番組リクエストがあった場合、手動でDVDを入れ換えていた。

次に、見学者が自分で再生開始できるようにした(DVDの入れ換えは、あいかわらず手動)。

最終的に、主な番組をHDDに収録し、メディアプレーヤーで再生させる「番組セレクトター」を製作し、見学者が自分で番組を選んで視聴できるようにした。

B. 自動放送システムー音声版の設置

- ・出港5分前のドラの音
- ・別れのワルツ(蛍の光)のメロディー
- ・船内案内放送
- ・ブリッジ模様
- ・着岸模様、補助汽船の音
- ・モールス通信、VHF電話の音
- ・沿線観光案内放送

などの音声が入った「センサースピーカー」(人が近づくと自動的に放送を開始する)を館内各所に設置した(試行錯誤して、現在、設置していないものもある)。

C. 自動放送システムー映像版の設置

- ・ブリッジ風景
- ・レーダー画像
- ・エンジンルーム
- ・客室風景
- ・車両航送作業

などの映像が入ったDVDプレーヤーをセンサー作動式にして、館内各所に設置した（試行錯誤して、現在、センサー作動式にしていないものもある）。

D. 船舶位置自動表示装置の展示

運航当時、船内に設置されていた「船舶位置自動表示装置」を当時と同じ状態に修復して、3階「連絡船のあゆみ展示室」壁面に設置した。

運航当時、GPSはなく、青函連絡船には、レーダーを利用した独自開発の位置測定装置が装備されていた。しかし、この表示装置はそれと連動したのではなく、タイマーで作動させていた。これは、定時運航が守られていた連絡船であるからこそできた技術で、係留船となった（動かない）摩周丸でも、自動的に「仮想」位置を表示している。

E. 懐かしの連絡船ポスターの展示

- ・運航当時に国鉄青函局が制作したB3判電車中吊りポスター
- ・運航当時に国鉄青函局が制作したB2判時刻表ポスター
- ・運航当時に函館観光協会・湯の川観光協会が制作したB1判ポスター
- ・運航末期にJR北海道が制作したB0判ポスター
- ・運航末期にJR東日本が制作したB0判駅貼りポスター
- ・運航末期にJR東日本が制作したB1判駅貼りポスター
- ・運航末期にJR東日本が制作したB3判2連電車中吊りポスター
- ・終航後に（保存船になってから）函館市観光協会が制作したB1判ポスター

などのポスター（すべて実物）を館内各所（3階「ロビー」、同「連絡船のあゆみ展示室」右舷壁面のほぼ全長）に展示した。

F. 解説パネル（「連絡船&国鉄利用のしおり」拡大版）の展示

国鉄青函局が1982（昭和57）年に制作した「連絡船&国鉄利用のしおり」の誌面を拡大して、4階「多目的ホール」に展示した。

G. 船内放送の再現

非常用放送設備を利用して、ドラの音、別れのワルツ（蛍の光）、船内案内放送、沿線観光案内放送、野鳥のさえずり、目覚めの音楽、BGM等、当時の船内放送を再現放送した。

H. 展示案内チラシの制作

告知チラシとは別に、展示内容の案内チラシ（A4判）を制作、配布した。

（4）入場者数（入館者数）：

28,630人（2011年7月23日～2012年3月31日。2月13日～19日は工事休館）
前年度の同期間の入館者数は27,827人（3月12日～31日は津波被災により休館）。

2. イベント「マリンガール乗務」の実施

（1）日時：2011年8月13日（土）～15日（月） 毎日10時～14時30分

（2）会場：函館市青函連絡船記念館摩周丸

(3) 内容：

事業内容 1. 海と船の企画展「青函連絡船と津軽海峡の旅」－Bで設置した「自動放送システム－音声版」の内容を「生」で再現した。

期間中の毎日、10時と13時に摩周丸が出港すると想定し、運航時どおりに

- ・乗船名簿（レプリカ）の配布
- ・元マリソールによる送迎
- ・元乗組員による出港30分前、5分前ドラの実演
- ・別れのワルツ（蛍の光）の放送
- ・入出港、船内、乗継列車等の案内放送
- ・元マリソールによる沿線観光案内放送
- ・元船長による船内案内

などを実施した。

3. 解説冊子（「連絡船&国鉄利用のしおり」復刻版）の制作・配布

国鉄青函局が1982（昭和57）年に制作した「連絡船&国鉄利用のしおり」を復刻印刷して、入場者に配布した。

事業目標の達成状況：

1. 海と船の企画展「青函連絡船と津軽海峡の旅」について

現在の摩周丸は、運航当時のままで保存され、かつ見学できる場所は、操舵室（船橋）と無線通信室しかなく、あとは展示室等に改装、あるいは非公開となっている。

当会が摩周丸の指定管理者となってから、普通座席の復元展示などを行ってきたが、これ以上の施設の復元は、さうとう困難であり、今回は企画展として、音声を中心にポスターや映像などで、当時の連絡船の旅を味わう、あるいは回想することを試みた。

A. 映像シアターについて

映像展示はすでに実施している。見学客の滞在時間は30分～1時間程度であり、長時間の映像番組を上映しても、全編を見ていく人は少ないことは分かっていたが、今回は、数は少ないが「時間はある、もっと見たい、もっと詳しく」という方もいるはず、また、リピーターのために、長編番組（といっても30分～2時間程度）をとことん観賞してもらうシステムを考えた。

結果は、やはり大画面の効果は大きいようで、時間のない人はそれなりに、ある人にはじっくりとご覧いただけたようである。同時に複数の人が見ているためもあるが、既設の映像ライブラリーコーナー（個別ブースで、短編番組を選んで視聴できる）よりも、利用率は高い。また、自分で番組を選べるシステムは、「ほかにはないのか」というストレスがなく、満足度も高いように思える。

なお、現在のシステムでは、再生がはじまると、今、なんという番組が上映されているのかが、分からなくなる。これについては、今後改善をはかりたい。

B. 自動放送システム－音声版について

本企画展のメインと考えていたが、音声そのものの展示は、音声ガイドや、音声解説とはまったく状況が異なり（展示物同士の干渉が大きい）、設置場所、内容等について、かなり試行錯誤し、一部を映像版に変更した。

見学客の反応は、連絡船乗船経験者であれば、確実に懐かしんでもらえたが、そうでない人には、意味が分からず、たとえば「別れのワルツ（蛍の光）」のメロディーが流れると、「あ、もう閉館か？」とってしまう人が、少なからずあった。

C. 自動放送システムー映像版について

音声展示と比べて映像展示は干渉が少ないので（隣同士で別の番組が上映されていても、それほど気にならない）、自動放送システムー音声版の一部を映像版とした。

とくに見学客が少ないときに、展示物同士の干渉が大きく感じられるが、それぞれ自動放送とすることにより、同時放送（上映）の機会が減り、干渉が減少する。

ただ、現在の「自動放送システムー映像版」は反応（センサーが感知してから再生開始までの時間）が遅い。しかし、センサーの位置を動線手前には、またしても他展示物との干渉が発生する。これは、費用はかかるが、DVDプレーヤーではなく、メモリを媒体にして、メディアプレーヤー再生にすれば解決すると思われる。

D. 船舶位置自動表示装置について

以前から復元したいと考えていたが、そっくり回路をつくり直さなければいけないと予想されていて、費用が捻出できず断念していた。今回、修理に出したところ、意外にも回路のかなりの部分が使えることが分かり（もう1つあった同装置からも部品を融通した）、浮いた予算でクリーニングやカバーなど、外側にも手をかけることができた。

この装置は、運航末期に設置されたもので、記憶している人の数はそれほど多くない。逆に若い人（といっても現在30代半ば以上）がよく覚えていて、懐かしんでくれる。また、今現在の子供にも、さわって面白がってもらえている。そもそも、装置自体が海図（航路図）になっているので、だれにでも一目で青函航路（位置、航路距離、沿線等）が理解できる。

E. 懐かしの連絡船ポスターについて

当初、当会のコレクションのみを展示する予定だったが、摩周丸にもいくつか保存されており、また、函館市観光協会等からも提供を得て、多数のポスターを展示することができた。

写真中心でセンスのよい大判ポスターがずらり並ぶと、それは見事で、館内がとても華やかになったのは、うれしい副次効果である。

23年前のコピーの「この夏で、もう会えない。」を読んで、「来年で、青函連絡船はなくなってしまうのね」と思ってしまう人もいたが、それもまたよし、としたい。

F. 解説パネル（「連絡船&国鉄利用のしおり」拡大版）について

これも、以前から復刻・展示したいと考えていたものである。

「しおり」がつくられた年、東北新幹線大宮ー盛岡間が開業、首都圏ー東北ー北海道の交通体系が大きく変化、同時に国鉄は解体への道をたどっていく。しかし、青函連絡船は落ちぶれたとはいえ、いまだ大動脈であり、函館も網走・釧路への直通特急列車を擁して、北海道の玄関の地位をкаろうじて保ち、また、ローカル線もほとんど廃止されていなかった。

そして、青函局は、乗客減を逆手にとり、航路外を運航する「下北半島周遊」など、「連絡船の旅」をアピールする営業策をとっていた。この冊子に感情移入できる方も、もう50代となっているが、こういう背景も読みとっていただければ幸いである。

G. 船内放送の再現

ドラの音、別れのワルツ、船内案内放送、沿線観光案内放送、目覚めの音楽等は、やはり、乗船経験のない見学客には、いちいち説明しないと何が放送されているのか理解されなかったもので、試行後はイベント時のみに実施することにした。BGM放送は現在も実施しているが、「やけに古い音楽ばかり流れているな」と思われているだけかもしれない。

H. 展示案内チラシの制作

今回の企画展は、特定のコーナーではなく、全館にわたって実施したため、従来の展示物と区別がつかず、「どこでやっているの？」と質問される見学客が多かった。

そこで、告知チラシに加え、展示案内チラシを制作した。制作が企画展末期となったが、次期企画展まで現展示物は撤収しないので、それまで配布を続ける。

2. イベント「マリンガール乗務」について

前項Hにも記述したが、本企画展は、音声展示にしても、ポスター展示にしても、従来の展示と溶け込んでしまい、いまひとつインパクトに欠けてしまった。

そこで、話題づくりとして、音声展示を「生」で行なおうと、元マリンガール（青函連絡船の夏季臨時女性職員＝船員）を探し出し、イベントを実施した。

幸い、新聞はもちろん、ラジオ（地元FM生放送）、テレビ（民報ニュース番組特集）でも報道され、大いにアピールできた。

3. 解説冊子（「連絡船&国鉄利用のしおり」復刻版）について

前々項Fと同じ。

4. 企画展の効果について

入館者数は、地震・津波被災以降、早期の回復を期待したが、8、9月が前年並みになったほかは、終始前年を下回った。その中で、本企画展の効果を分析するのは難しい。

従来の企画展も、必ずマスコミで取り上げられてはいたが、今回は広報・宣伝を3期に分け、またイベントも実施して、しつこくプレスリリースしたかいがあったのか、テレビにも多数とりあげられた。

市電中吊り広告ポスターは、異デザインで3期とも制作し、掲出した。今回の市電ポスターは、ひじょうに評判がよく、譲ってほしいという人も多数現れた。

結果、テレビを見た、市電ポスターを見て来た、という人も多数あった。しかし、それが入館者増までには至らなかった。

本企画展の展示物は50点以上にのぼり、摩周丸の展示物は、壁面長にして30パーセント増加した。これが、今後の入館者増につながると信じてたい。

事業成果物：

1. 展示物

- A. 映像シアター 1台
- B. 自動放送システムー音声版 6台
- C. 自動放送システムー映像版 5台
- D. 船舶位置自動表示装置 1台
- E. 懐かしの連絡船ポスター 28枚
- F. 解説パネル（「連絡船&国鉄利用のしおり」拡大版） 15枚
- G. 船内放送の再現 1式

2. 解説冊子（「連絡船&国鉄利用のしおり」復刻版）

2,000部

3. 告知ポスター・チラシ

- (1) A2判ポスター 100枚
- (2) B3判市電中吊り広告 3種 各100枚
- (3) A4判告知チラシ 200枚
- (4) A4判展示案内チラシ1,000枚